

永山：——監督のお仕事も過酷ではないですか？

日向寺：自分でやっていることは、あまり過酷ではないと思います。

永山：——野田先生は、ご自身で自分の仕事は過酷だと思いますか？

野田：思ってますよ。

永山：——清水さんはどうですか？

清水：撮影者というのは、肉体労働というところが大きくあるので、撮影しているときは芸術だとは思っているわけではないのですが「これは使わないだろう」

と思って50時間撮っている訳ではなく、全部OKだと思っているのにほとんど切られてしまう。撮ったものを見たときまでは、その映像は私のものなんですけど、撮り終わって監督に渡した時に監督のものになってしまう。

だから、これは残して欲しいというのはあるんですけど、職業柄しょうがないかなと。先生を撮るのはどうしたらいいのか、当初色々考えたんですけど、「リアリズム絵画を描くっていう人をリアリズムで撮る」と考えました。徹底的に画家の描く姿を記録すればそれで映画になるかも知れないって思ったのが、開き直っているんですけど、そう思って撮ってました。

永山：——監督は、清水さんが撮影されてる映像はモニターなどで見てみないと、どうなっているかその場では分からないわけですか？

日向寺：分かりません。

永山：——だけと俺のものと感じはしますか？それともやっぱり、それは清水さんという一人の芸術家のものだという意識はありますか？

日向寺：清水さんと仕事するのは今回が初めてなんですけど、昔から敬愛するカメラマンの一人だったので、最初にどういことが狙いかって事の根本さえ話し合っていれば、あとは逆に自由にして頂いた方が縛られないといいました。清水さんの発見が無くなってしまおうと思うので、清水さんが自由に発見していただく中で、僕も気づいたことがあれば、これは撮っておいて欲しいとお願いすることもあるんです。



永山：——清水さんが発見したことを、日向寺太郎作品というわけですね。

清水：映画ってそういうものなんですよ。

日向寺：非常に失礼な例えを野田先生に承知の上で非常に分かりやすく表現すると、野田先生が魚だとすると、魚を釣るのは清水さんなんです。釣った後それを塩焼きにするのか、刺身にするのか、フライにするのかってのが僕の役目でもあるんです。清水さんはそこを兼ねているところも、もちろんあるんですけど。

永山：——下準備くらいは、やっておくんですね。

清水：そうですね。これは塩焼きにした方が良い。刺身にしかならないように釣るとかね。

永山：——野田先生は撮影されながら、今回ご制作されていた作品があるわけですが、これに対してどんなものを、どんなことを見ておられたのか。何のモチーフを描いていたかは言った方がいいのか、良くないのか私は分からないので、あくまでも新作ということではぼかしておきますけど、新しい作品を描いていく中で、どんな美を見つけたのでしょうか？

野田：だいたい決まっているわけですよ。前提に「死」というのがあって、死すべき人間が何を考え、どう生きて何を表すべきかという。今日、監督とそういう話をしたんですが、やっぱり通底する。完全に一緒だなと思ったんですね。監督もやはり出発点は「死」ですよ。3作とも後で振り返ると・・・何か言っていましたよね。

日向寺：私の映画に関してですね、映画はこれが3本目なんですけど、実は今回いろいろマスコミから取材

を受ける中で、3本振り返ってどうですか？って聞かれることもありまして、振り返ってみると、物語としては同じ形を描いているんです。

と言うのは、悲しみとか、苦しみとか受難とか、そういうところから立ち上がる人間しか描いてないんです3作とも。それに気づいて、全く意識していなかったもんですから、無意識の中で自分が人間に力があるというのは、何かから立ち上がろうとする人間を描きたいんだなあ、はっとしたんです。そのことを雑談でお話しました。

永山：——死すべき人間ですね。と野田先生が仰った時点で、「そうか、野田先生のことをもうすぐ死すべき人間と思って撮っているのかなあ」と、ちょっと心配しましたが、そういうことではないのですね。

日向時：そうです。そういうことではありません。

永山：——撮影にあたって、たびたび伊達市に逗留していらっしやいました。結構長く伊達市に住まわれて、そして野田先生のアトリエに足を運ばれていたの、街で見かけた事があるなあと思われた方もいらっしやるかもしれません。お二人はこれまでの滞在中で印象に残っていること、何かありますか？伊達市の街でもよいですし、人でも良いですし。自分たちが過ごしてきた時間の中で、「伊達でこんなことあったなあ」と印象に残っていることがあったら教えてください。

日向時：それは、延べにすると2ヶ月半位居たことになるんです。山ほどお話したいことはあります。伊達の皆さんに、特に野田先生のお知り合いを中心として本当にお世話になり感謝申し上げたいんですけど、その方達が野田先生を見かけるのはいつも酔っ払っている時ばかりで、酔っ払っていない野田先生を見るのをとても楽しみにしているってことですか、あとは清水さんが話されるかもしれませんが、2月から3月にかけて一番長く居た時に、雪に車が閉じ込められて・・・そこから清水さんにバトンタッチします。(笑)

清水：東京で生まれたのですが、雪の中で車を運転する経験は無かったわけではないんです。実は、2月に伊達市内で猛吹雪に遭遇して、よくわからないまま雪に突っ込んでしまいました。監督が外に出ようって言うんだけど、この会場に来ているある方が助けてくれたんです。だけどその時、このままどうにかなっちゃうとは思わなかったですね。



NHK「日曜美術館」で紹介された野田画伯の絵画に打ち込む姿勢に強く心を打たれ、ドキュメンタリー映画の制作を企画した。撮影は2012年5月から開始。「聖なるもの」シリーズの一つである「鳥の巣」の制作を50時間以上にわたり追いかけた。

永山：——あまりにも経験したことがない体験だったということですよ。

清水：具体的に「危ない」という気にならない。前もセスナでエンジンが止まったことがあるんです。急に静かになって「何かな？」って思ったら、パイロットが「掴まっててください」って。でも撮影用に座席全部外して掴まるところが無いんですけど、その時もこれで死ぬとは思いませんでした。

永山：——本当に危なかったのかもしれないですね。

清水：交通事故で死ぬと思われて、飛行機は止まる、韓国で車がバーストして危ないことがあって、3回は死に損なったんですけど。

永山：——カメラマンっていう仕事はそんなに大変な仕事、いつも命がけっていうことですよ。

清水：そういうことになりますね。

永山：——いろんな体験をされて、楽しかった記憶もあったのではないですか？

清水：美味しい物を沢山いただいたので、伊達のロケに行くとなると、「ああ、また美味しい物がたべられるな」と思います。

永山：——伊達の味という記憶もあるわけですね。

そういうことを、沢山ご経験されると、野田先生の撮影は終わりますけど、ちょっと撮ってみたいと思う人とか、あつたりしますか？

清水：まだ、2時間前に終わったばかりなので、何となく「終わってしまった」悲しみってのは、いつ